遠門
姉990
巻5

本清

賣油郎卷之五

浪花　芝屋甚之丞

五回

ずたにさもの
ある月長
松下の仲居霜とい
へるが役目のうるおひをてゝ
清まを路ゝ
頼房まきとる紙。よきをとりたりし。鶯羽の客
くとまをえしい紙油うるらをやと弱ぬるふたふ
らずとくよいよ〳〵わやしきを類よ波とよとけまへば
氣いふもひす氣ひとことばやしも。ゝ余を湯が激の
紙と去るゆへす。ととも手松下を合おの去を作よく
いまゝ氣たまゞたやをくろうすべきやらもあらすそ

のまく嘆ぜしかへりしに。家まさりしを吾妻路な
きべ。かの島ら一点の笑よ家してけるたがハしと暁を
ともかくまでふるく極るふかるらざる細あらん。
いて虚実をさくらんとおもひ。時しも秋のてしめ七夕の
宿未よて長松下ふいたる。客人いまだ来らざるいとま
あまべ。小三板をやてて氣味ゼ。拙る器さ絞るとれ
バ蓄ひとつ所重るふ。中がてかいたて猫金かきそる。
家の盗にのセて拭まる氏。吾妻路ハ二日ぐらうのうて。
かぐりぬくよろとび。小三板ハ拭せたる高ぶ〻ぬるうて
氣ふあたへくるべ。としいたくて。歩大坂ハ出てひらた

ゑるよ歩金十三銭あてるべ。家ハ大ひハ猿我ぶし。
こべるハ一盞の酒ふ。かくハ礼をなしたまふい。まをに
出名の間家ゑうくふかひ化ふも吹廉なしりをバ人ハ
かまが家蓋代称して。彩所の夕方。吉原のうち尾もの
かハと差しその名うくをとへ。いつまの青楼ふ紛ても。我
一と撥婦をとりて是賞ふあつらんといらそひりうの
日吾妻路いたぶをうて。一日二日うち所てみたりし
長松下へ小三板をやて。氣女ふ壁託ったきあとの
ふるまべ。遣るふ一ま鞠房まで来てたべといひふらる
べ侍と共ハよくも来る。わづまぢハ何なつうしげ

礼を述て、茶よ菓子よと奏乾し。さていひ名やうハ、ま
ぜころハいたづさまて、勧めを意そうしが。けふハいちと仏地
うて餐をうせんとれりひけるに。ゆあしく松島もいと
つきふて、ふ、ふし。他の人成たのもたまハ。撫あしくて味よ
からず。近比茶のどくなる、ごとなるとも。そ拵
ふハ比とざる物なきば。男成まげてたまハまかしと。たのめる
成男て。出名のお付るとも、我名撫とのはたるしくい
へるふ。あづま路ふてらひて、さる早下とし志たまひを我
茶の年紀の路宿人が居けの塚ふ、その手源を知
てべきい。ひたそ、ふたのもたしとあると。塚も鎌迫ず

さあらべふけ、かるし、しけづうるしまいらせんと名結
るすそひまに。ふ三板の整望ハさうしも。撫遠筆持
出て。花魁が手ま垂そもとば。性霜ハ法ふ立ながら餐ふあば
ろ女房士号会ハはあ人とふ一の鎌のしるしと振房の
仇にや。浮世とれしのる哀ひも。いたつさあるる花魁を。
撫成茶せんたるるきがと。整聖さんに張の一もも雪ま
ほしと。ふ皇せらきてるふ志がと。しげのい警部意うてたび
たとしくい行らへど。塚の網子会せるも。扇ふ捲たろ
かぶろ松。茶地をうせて唱号さへ

礼きー餐とそをうへし。いとしたとこのあまとて

おもはぬ人と契りの。どちもあたらぬさとせんとひくまふなびけ給ふやさしいおまへかまへがきの。
ながきちぎりとをたてぐんくしの九十九髪と佩えるを学とめて。吾妻路のいとし男のたりかもふもとめ人ふ髪又とかく。浮まくを拵者の身となりて。
花の街柳の大路よ年月城さるも。石世の戒約つとなく一双のひじ式まげていい千人の拵となしつ。まぶの巻城おろさせて。夕よ老と送ま和よ若をひっへとよすと人義
若人の陳んおをとも仏ふそまず。まくなることふも笑を献てなげの情のをちのく。人の細布物あいて。たてなぐふを

打ぬへと為の深未仏手ふ為をい

二世も三世も。かけてむをんで。おくを髪コかゝ
ゆゝ式けけてをけ たけ志んくのきんくのこゝろも
をゝろふ茶釜盤

あゝろもをゝろにおうひつめ。若の沢とめ身かとハて。私情
犯る女房を。身のまうゆきハ志らぬ火の。紙紫のひとて
さそそをて。まんをゝ之の雪ふゝを銭路の人の表とゆう
志の打山をゝとさゝ。をゝゝこゝも若寄川の測測と
かハる人をゝろ。世式後ぬとい藤の。さそゝ人あるを身と
らを。

たゝひ屑へさけがみのひらことかゝの怪笑ふくこ
怪折をりのあハせつこ。ふりひゝたる尺ちの又の
ゆ出でもかけもとゆひかゝ〳〵ぬきてみらかゝり
と唱えるゝ名のやさしきふ。ふ名ハ金名なくずいまて
ふもハずもよ拓たる。ゑ油の魅玖あやまらてゝりくま
たんゝなせしを。あハやと當めしらど。花魁が浴衣の肩
ふのゝつたる一筆の油ハ。こるがうちにぞつとひうがとた
ふ綱ハふどろさ氣あやまちを怪るれ。吾妻路ハ返て氣
つどくふたりハ怪。浴衣を脱うへてゝ〳〵やう。名古して
汗ふ染たるものるゞ。彩多の後名てたまハきと浴

染なの敷草帯ゑとをそへてあたハきゞ名へ名文ハい意
なし。こまきなんこのゝ名よとて。眼もなくまろとひ嶽文っ
抑戴けゞ。花魁ハよくくたひを焼しと乳玖なす。ふこ板
塹野ハ広ゆて。塗匹盤ふ湯玖油いき。洗粉を染てふ玖
をしがせゝる。おうの浴衣ふ染たるゑ油の。油光しふ弘
かきろをきて、吾妻路ハやう。ハ油のひろゞまごゝく名
矛を愛想なせる愛油帝の風夢。廚中ふ油うハ。ゑねごる
人をてもあらぬとのる。そをきもへハ分ふ對して信寝れ
ゑたし。かるどしも作ふ洗されゞ。ゝ美を若半えさせた
まハきふ。あの日鯰羽の台昂とあてしハ。仍ハまふして

若御成仮個なせる。愛酒郎ならんといへば。哀いと花魁をへ
ばども同せたまひしるながら。実し谿羽の名鳴小遠と
事ならずと。かたく侍いろと。傍辺小学者の歌人酒さう
しくもいとやう。毎日花魁をい酔まさまて序上の
客新。くまやうふい笑えたまいずくも。幇間泉の来ったる。
かの谿羽の名鳴とゆえしゆ方某い山時の住人酒場の某
とをのたまひしる事成。さらいはのこうにゆとうさらしとと
ふ。ふ高も今い係じがとく。白北よ紅らせたまへろうへい
何とうさ侍らん。いうふも其事爲たがいじとうるつく。左
あらば出身の合高よて。見と同をろふ何のへかくまでふうく

侍ったまとそといへス侍よ高いろうう成えて声をひそ少ねも
ひ貴酒郎のるふつきて系の侍ろう。さまどもとのひへあ
まて。秘をもと。今出名の弱よ余義なけまべ。微弱よ侍至
やべし。かまい余を懶と呼て。山涛ふ住る酒貴人さ。一日
高極るる歩扮ふて来至。花魁をまねきたしとう人会来
ま服風就とおもひて。るぶうものとせしる成。東左国房へ
いま。紙世成同孔しるとべ。どしろ来雅望ふて無物ふして
う一年系の年若成侍まて歌独東通成畜へたる貴尾と
皆て。体と家どうけがひぬまど。恒よ廊中小注来しして
酒成ひさく人成客とせべ家の名とま。こっふい出名もおそら

くい雲母なるし殘ハぬもへ。給胴の名聞ハ至と浪費せしか。
全く赤子の仁にあり。去ふうて合点成難し。況ハもらさば。
かゝらざいとまを出をべしと厳重なるハはせよおそれて。たき
志もはるゝ程なり。おなかしくと戒かうをと。人ハもらしうゝ
ねどゝ。是正ふ天余を御諫と空きうせず。はるよ雲ハが
口とかゝて。事の始末明白ふ告たまへならん

〇十三回　はをせぬもの

當下冤魂が心中刻がどくはらむがごとく。頻ふ懊悔して
吐息をつき。まと身の上を顧ミをべ。かく移陽とるく宋るも
父母兄弟のたらふしあまべ。虞若しといふも、ねども。彼義

ハ美の西祝ふハ嬰孩してあるまいらせしうと。命下いはまと
ものゝ心もとをまへねべ。都てのことい知ねども。表角あるし後
の祝式年とをるとの義の通。りの本よ書こゝし成。漬たい
ことふかゝしきい人肉経紀よ物挙。只一日の孝もなく。物ふし
ごとの青信よ。せめて義を送らんとおもへども。義父の物
情しまず。まとるふも名身よへ。言約定の夫ありと是をべ
あだしく人ふ身を稼とべ。女の乃の支どるもへ。初ハ浪花の野叟
ふて。花の戸と呼しく雛妓の。はを出しの日の客人とも。日暮ハ
踏ざるハ表ハ花御を身ぬとこと也。心裏ハ夫への操を立て孝智
のををかへねども。初の後を退とけらを。唐女郎とあるべを成。

けん西湖よりうまれて。まとりまいらの小屋へる京師のまと
ま。宗時石田赤坂の欠の長より外に賣とも。公の指いやらしと。扶毎
日ごの石門より机式様さめ動て。賣式金ぬる沿とらるまま。
そも松うさる朝より。至ろうとやを年の扶まて。教く
繋さあ日の外おぐり。おひひの測より沈まてい。扶死て堅に
形うるんとおりひ宮ひしとるまび。いづまの宮人よも紀し
からぬけ年月。いまごまま賣油命のごを主の賣の人より偶
ずあり〳〵秋の深公よほださまてい 姫毒ぶ命とも。ま
いらせさまれひるまども。先よもいへるごとく。言約金
のあるまび。下級式歩為て楽んとふいあらず。今一度

まいらせまい。雪く机式速て盃ともかいし。約を偽なが
ら兄弟のごとく。睦まかたらひたをまへ。係のる式をうま
ほしく。さてそ内外よる賣油命まるよ〳〵式相しに行へうまをしとよ。尤あまびふ
三扱の整望ぶ中〳〵ふ遠ハず。大山嵜のまろまこと。
汀内屋系まる人の都亜にまりまさとや。まて単はふい
ん死御よ来まて。油式販をの人とうまび。彩毒ぶ係公
とも。ひそうに苦まうせたまハまし秋い森意ふ。もてうせ
〳〵式悔て後ゃさんと。只顧意ん式〳〵と行うかの
ひとふ再今式新まんわハ。外ようかに人まし。好さら

美しき男と女とらへい死費の美金も。信ひ候のひまい
らせたし。何とぞ前尾よく外をたまいまと。余義なく新め
吾妻路のたくのそろ成推量お客も作に紙ぬまて。そよ
ふらをぬ涼西の。むらさしごとく形り。東路つよ〻〻旺き
我身の家侍よ余程煙成りたきバ。主家の前尾やなし
かまるん。こく泊らせたまいりて。表小も角ふもよき左右成
苦たまハまよと。其程ゞ何成塩ふして。苦ハ紅葉へをかへる。
夫より吾妻路ハ義がきらせのそまの成。田面いろ〻ハ湖
の月ふもいつしらうりをきたまび。時きせしと投影し。いつふ
揚きて月どましく鞠ねい。小三板しげの小持ゆる文庫の

裏ふハ。おうしのたけ成こまし〻と出こめし。お幸ハりしや
蓋中ふて。かの賣油郎成とうけるバ。雁鍋成遍ふてそぐに
中福と徒ひ未まよといひ含めとて。和通ふそし〻ふり揚
屋所の方へ忘づやうこあ四ましり。賣油郎を見届ず。よてそ
内別やまこうろんとて。あろ青樓に主入れきたろ小三板二個を
出口ふ老ハし。今や未ろうと待せども。日の暮ろふふうし
までも未たちどまびいろるやらんと。ふくにうろと猶
やし〻ろ。小三板ハにくふいつも単日にいきたまて。今日ふん
未ませる日ふろふ。明日こそ来らきつらうとて其日ハやぬ。
却説濱のとうろる油場余た素門ハ老裏して。両眼明う

おらざるうへ。迚余を憎い身退きて淫婦源女い偷
渡傳助と計りて。合あの贅をいうゝ及ばず。亦生大事卑劣に
いたるまで。悉しゝ探ち去。ともや奪ひ去せしゝ歟。何国
ともおく西個い逐電をしゝ。跡に残さるゝ余左衛門大に
悶え躍躍して歎きかるしゝどもせんを。さるん何国
大にも成倉をしゝといへる左衛門。偉の去ども、両個め
所おな時ましゝくれもひて教日徒方成たつれもとむきどを
さらよ去向ゑをざる由へ。皆と牙成嘗て日成遣りぬ。余左衛門い
老婆ふおよんで。加強成さやまゝセーより病易かさるゝ死とも
合来ま一個の人もおらざきば。推うい看病ものたろゝさるゝを

余を嬉偽へなておはひまれどろき亜よ淫の街かきて義父の
容体とうゝへば此時老まま余左衛門い嬰婦ゑ哀ハさをしゝ
おちもまく母行ゝくきば。余を婚ハ源女傳助ゑ密通をせる
るい。ゝ時ゝ知るといへども。おゝの悪ゑあらんといふも
かけずとて。ふゝく心裏に憤ゆを成ふくゝ。何国よ逐かくゝ
とも天個ふもゝ本あるまゝ。やゞて自業自滅とあ個ゑ死よ
悪報来らんとて。三長両経はもるものがゝふ時別を移経に。
何ゝをとゑを用ゆるゝ背ふかゝらさきば。余左衛門いゝ
余を淫ゑ者ゑを教ゑ歎秋をし。かくまで行をひぶゝ蛮
亜ゝる人の為余ゝして逝るん成ゑ顧をゝ。ふたゝび死を

あづまの遊

奥さんとものゝ徒じるふ。余古来つハ病着日〳〵におもく吉林
まで徒くとゝいへども験もあらさるゆゑ余を湯もせんとおく
山峰なる宮ちふ日来し　揚谷の紀世吉に名釣を結て義父の
看病より呼時の為も病家を去ずかしづきうきども老未のくるゝ
もろくも世界くふよいをとて絶る臨終の風を去りハ余を湯ハ
かるゝ〳〵さいさんくるくまの父を見ふりしゆまどもかくてうつ
あつさされあらどまべ世幕の業をそをくのゆをねむるる
るゝ〳〵時。郊外の三昧ふ新さる石碑を造らせて毎日毎ハ詣て
来て在ずを孝養い文より紙をそゝがさし。斯る河易交歩
の々土竹茅なるもの京来家富て驕者の姿ありて。恒ふ千五百金

越ゆゝし。彼吾妻路ハ一時より望名ある武士屬く文学ハ舎ま
まうて彼ハ駕を歩迎をもつぱら黄金の花武侯らしゝ
ゆ珍ひをえをまども。五書ハ庫のゝ法とめて拙序をゆ
るさず是未余を湯ハ主体をさらざる為の和をまばまして
彼より一方武郷〳〵ハ。侯うまとゝいくで振付て遇さまいかの
交歩の大をハ吾妻路ハ岐家より岩て侯良せんと外まとも吾
妻路ハ拾投屋一家の標書ふして。彼一人ある水〳〵小牛より
氣星の裝ふゞどく。他の妓をる舎ふ留らずいうハせんと思ふ
折〳〵そまの日侯江橋の客人ハ後引て南山る宿でゝ〳〵若る
者ありしゆへとを屋をの時来まうと。西二家のちぶまをゆを

かたらひて孤川の辺に待伏させ。かの吾妻路が行囊を奪ひ、
ば報の黄金をあたえんと約し、毫も疑ふ其日ふかまべかくる危
難のありぞとも覚えず。墨江橋より弁慶を伴ひ、義経仲
居六頭を附添ひて紀州どにとある竹藪の蔭にぞ隠れ
三人の悪党あらはを出。まづ吾妻路が乗る行囊の者の向郷と
忘れ、ふ歩を運ばうんとする時、倒るる像に二人の強盗ハ行囊
を奪ひてうけ出す。やらしとなへる死郷の去ハ。もとより
かよハさるまべ。残る一人の怪者よ。義経よ歩るされ。且
大きに怪ありきうちと。西島さしてを引うへ。忘八の肉い
大きに強ぎ立て。行方に人ハ先らせて。死魂ぞ紀州

もしらる

〇十四回　あやうれものの

ちに行輿の庫平といへる者あり。西崎に年久しくそなて
なげの情の文をひるし。思ひ遠ひひの警戒界へに。
竹藪の庫平と呼びて。義経しを男みるが。実人の作ごとく
よ至て浪花の洋ふ下て用個へかへるさに。橋塚に俗で孤
川の紅波を誠て通と思ぐふ。命ぶり息絶して死まる竹
輿ぞ。ばば。我廊にて用るまれる。哭る男ハ面と
手巾もて覆ひ。後とも知らねど。何とやらんちやしと
わりしよ。哭るの裏より吾妻路ハ用てやくもとめて。

陸奥どのゝおいはさずや。けりなくやくそぐち絶はきと。夢よりも
はゝ大きゝ弱きとくもり雨雲しおりいるに。全盗賊
何ぶへゝ連行ぞと。人よまくやく捧輿とつて北上へそも
きゞ。二人の破落ものともいとゞ組付城。右と左へ振ふゞれ。
まゝと名付をねぢ伏て。花魁をふハけ隆ゝもとまゝしちへ
急ぎたまへ。新ハ跡より追付んと。まゝ。吾妻路いうきしゞ
ゝ統の根とまぬゝきて。歩ともきぬ通芝の夢ふゝとけて
そばぬる。猪をもくげかいゝ。岩だゝくて紛ほどゝ。ゝやはもち
寄て。人里い遠ゝ犬の声まへ文月もとゝぬ青雲に。孤火ゝく
てゝそゝゝ。いつゝゝゝ。ゝに踏まゝひ田のくゝにをつ畑中

まろびてとゝる三昧にさゝ助ましゞ。多い強弓ともて生
とゝもゝさをゞ女のかゝいくも。石ゝはまづき倒き伏ゝ。そのまゝ
息ハ絶ゝ。月下老人の赤縁を牽ゝ緑ゝや夢泡夢の
余ゝ清いゝゝゝん義父の忌日に菊まども朔まゞさゝ言に
いたゝゝ家事ふせいゝく。術ゝ此時墳墓とゝひ浄んと
三昧にゝゞす夜の憂ゝ年ゝゝゝ踊女の。ゝゝをうゝないて
たうゝ居ゝゝとゝ京来仁ゝある本性ゝゝいたいゝく思
ひて嚢中ゝ業成ゝ出ゝ。携ゝ手ゝ捕のゝゝまて結びて。
にゝふくませ。旅ゝ掴ゝ海ゝもゝえねどもまゝ此迫ゝ住人
ふゝあらねゝ。石城ゝんゝもゝゝがさくゝさまゞ会拒ゝ

ほどに。東の山の端より出る月新よりえきいといふ遠うぐもあらぬ吾妻路をえきみまバ爰うとぐうおもはまてあつまの名もてはうくせいやがて息吹出て眼ゑひうき行人かはぐんぜねども雪さ晴よあつうて活るといひ活〳〵奥ゑ歩こんやまぐそあふおりひきや。日は指重ひたる人なるをへ。まめともいとぐ多元をぐりまくと活てぐ居くうる。余を活ハ大ひふあやしくて。孫田ゑたつぬるふ。彼角接の仲居より微細の伝説ゑ雪〳〵。元〳〵と墓ひたる石元をしく。百万の一もいひとげがさくまさ入り日の光雖も。行人のみせる業とい紛〳〵ねども。伝またひあたまるハ。爻聖の大をが。後良せんといへる元唐〳〵也へね

こを。ひる撰〳〵まごと元みせるをなへ伝るを〳〵雪て余を活ハ歩騎をを。さあらバ恵業者ゑがとつてかへさんるも手ぐをし。元をあまてい光ゑるべし。一ゑも速〳〵西鳴へいへらんふきい：元をハ元ハ元ゑ迫のほどもまを元をハ〳〵。元ハ元ゑふて行輿元ゑうて来るまで。人目にもくらざる中。墓ゑの石陰のかげは身を見びあまとつへ。ふへ陣平ハ恵元ゑてかけをを。ゑ来波爻と全盗の事ハ〳〵紛元たるるまい行るもいてず。悪業者ハとぐく縣主へ引法せバ。もてや路とに元をひあられバ元盗主の伝伝ハ我ふて幸元。まをゑるく元ふふてめぐり舎ゑも。ゑ孫のるすふるまバいざ西高へ活引中バ

と進をども今日なん義父の忌日にもつて。三昧ふいなるよしとさて。
ゑ筑表もいさく文ざるうちよ狂ゝうたまへ明日ハかゝらず角樓
まで来るべ、しし行とる西へ五吾妻路も傳平も余ゝ湯のつゞま
ふく、おをのる筑表を主て別を去ぬ。却説今日の破産ゝの首領
筑。いゝ和るものとゝれ。先ゝ泄屋の姦夫傳助ゝかとめゝゝ
たる金銀雜具衣類に至るまで。悉く清ふとゝを分のおさごゝゝ
ゝさよゝに。ひくる悪るゝ加徒をしつきども。天網のゝをず洗に縣を
ふとゝゝを主京の向悪まで家財して遊廓女もとゝもとゝに罪に
行ゝをハきたるこハ後日の事ゝをいとる。今日西廣の強勢一ゝとゝら
ざる和へ聖の陸平出標吾妻路を体ゝひてかゝるゝまゞ死たる

蝶てド半出の發心せんする要む。徘し給ハんや否ずや。余ゝ衛
若くより嵯峨の畑に牡丹を植るに等しく。事さら不對せず。その
のうへ業が業ひ早く本持為なさば。若が一枚の價にぞ。一年
余の労を積ぬましてと續分を價ふ人と。百千年を歴とも猶
かたしといへ。五百兩をそのまゝあちが爲を労したまへる。我いなぐ
郎が真心求めて貴賤を選ハず。ともやかに妻と定め。其の
孫さんてふ事を許し給ぞ。一條の結あり。若年嵐山の梅枝の
咲されて分まゝし朱雀野にて。見うけたまひ徒ちん。
その時の大尽ハ。室街の梅郷といへり。彼客人ハ華洛に宮へ
たる大紙屋にして。若冠より風月をなし。名ある妓を數さ

續分して。嵯峨荘に移し置せらましが。其荘園の人にして。
書いら陰德を好みたまひ。そをまし。續分の生涯をあたへて。
親里に田し。或ハ自から嫁して他に嫁らせ又まその恩を
わすれず。只一時の逸樂とるのミにして。今其年經耳頃み
こゝで。雲客ハあらねども年日に青楼にあそびてあまたの遊
妓。幇間を召つかひて。酒のミ狂中として。彼いしかく事をぬゝきへ
いつもま傍に待らせる也。此大客にまらいを續分して時郎
あらば配偶せんとのたまへども。本性をいふ娼へハ客の中にやあらん
人の中に人ありて。公界十年の花ありが。東廓にて
故にびて。花過ぬとるらへき名をまで。只梅郷の大尽が

俗揚ゐらさる風顔成古よひて。〻勅ゆ〻屋さめて。祝よ
宝成着きば情郎のぐく。を祝しきい父とぼび嬢と変しう
ゆへふ。とさび良人成悔て。後名の行成ゐしけろ緑面成古げ
まいらせゐば。牙を續ふいたまいるべしと。宵て余を嬉てふたと
ひ花街の門い出ると。恒ゐ大度ゐ往ゐまて後縁成まくひ。
耳をふあをたまふ牙をもて。糸ゐ鼠い変しくて。拙板悪食
ふだもゐくゐゐゐ。いぐ一日ゐ日の宝ゐ苦ふも。後古のひた
まいどとて。いやとゐ花ゐ与らずとらいが死ひたゐ吋いゐば。磐
成まとひ。変ふい曹孫を紐ゐ換ゐとも。更ひいといどと。固くも
後良の商量成宝ゐ。かいゐ而へ梅仁大ゐハ。角楼のゐ人に

命て忘ハに續牙の事成非ゐしい孤らこうれる洞年ゐ。院
ふ吾妻路い拙花の緑ゐて。後名の配偶宝まりりまとば。今や
花街を出ると
年月のうさ鳴糸もさとろまとろ人の名行にぬゐ。後こうれ
と係ぜし自筆の経冊ハ今も狩西高ゐ義せゐ人のゐゐゐよし
ゐ。掘梅郷大ゐい余を嬉ゐまを。後法妓法宮ハ角楼に成
ぐひて。名行の酒成使せしば。後ゐ。ものい岳のぐく山のぐく。
変代ま牙の壮紀ゐ。かくて後吉日成ゐ。梅郷大ゐいゐづ
内を永暇ふとし。角屋の主人を嫁とし。余を嬉が方へ嫁てゐ
年く月く家富さこうえ。一男一女を後てゐ孫永く待へしい実ゐ

低塚の君子として螺髻の賢法となりて。人世の富夫貴足世の移りゆくを正に余を博志保の形状を。天寿無窮にして大変新婦に接けそまふるべし。

賣油郎五之巻了

新増補

萬代早引節用集大成

薄紙拵の生冊小笈有表紙にて至極奇麗に仕立机上らさびくにて甚便利至妙に成り

此節用集を字数殺多れば。文字を尋るに仮名数の早引なり。其中に天地神佛官位人倫衣食器玩草木生類姓氏言語等の部分ありて。仮名附に歌学家にて定て改め。又別に其外字を階書時に使の真字うて筆畫の類義を礼し。和漢官職其名義現在雲上方諸御大名衆の郡毎に御家領国城主名其別名処古跡神社佛閣悉く国所附。其本系種の異名を礼し

孫炎姓氏の尚時何國諸侯の世藩中に有事を巨細ふ記し。巻末に諸證文手形を案文男女名頭相性年代六十國諸王一ゝ官都合地四千官用名其外重寶の支數多裏既ふ漢土字書ふも凡四万三千余字を〻悉く紀憶こゝる者稀ふり。本朝の熟字佐治ふ至てを〻繁多業に。先ず取扱ふ文字と俄ふ忘ゝる事多繁今此万代年引ゝ字數拾一万余紙貳八百三千余ゝ有ゝ成文字にも漏ゝ寄集編ゝる古今未曾有の三都諸國記會ゝ書林行寄ゝて求メて法下ん

六樹園大人著

都乃手姫り　全一冊

江戸ゝ在住ゝ紀地の中も伊州ゝ西ゝ出ゝ有ゝ名文ゝ紀ゝ名文ゝ有ゝ

徳齊原先生著

先哲像傳　全四冊

先哲名家ゝ事蹟のゝ省像の傳ゝ有ゝ新ゝ古人の省像ふ對ゝ時ゝ新ゝ違ゝ其人ゝ徳も現ゝ

新著門集　全十冊

此書ゝ古ゝ世ゝ作ゝ紙ふ記ゝ字ゝ有ゝ花實ゝ緑ゝ集中人の性名居所年齢を詳ふ記ゝ古今未曾有の孫書ゝ

山崎美成大人著

名家畧傳　全四冊

先哲叢談近世畸人傳ゝ世ゝ名言ゝ逸事ゝ文人墨客ゝ書家ゝ聞人雅技ふ至ゝ由来ゝ省像ゝ真跡ゝ集ゝ各小傳ゝ

淡洲樓喬馬大人評

閲卷百笑　全二冊

世に云い喬馬大人の集る処寄合
物語りする人々皆れ物知りと
なして老若男女たろう安紀
ふうの人はけうたまべ長田紙
清しも夜の采帳をもつぐるを
はじめ一書に実ふ是を開き
ふれた処ふ笑を催ふ作者
厳格の人らも絶倒せざる
なし一統して冠巻百笑を
録するに虚あれを知り玉へ

浪華書房

心斎橋通博労町角
河内屋茂兵衛藏板

松亭金水著

大平樂皇國性質　全二冊

此書を儒者と俳者の説に異
なるを論を説はめらるを古今
風俗の変化あるひを神社ふ
繋ぎ紙をいろいろ誤りをいふ
説或いはちぐはぐ三味線琴に
説豪富貧士を侮る夫婦喧嘩
やなるものいはれの咲云その外
挙てうぐ人ぐ何ことなく雑俗
にすふ説をはけまる孫書なり

東都川關先生著

早引人物故事　全部二冊

此書ハ本朝の昔より近世ふ至り名将雪士を
はじめ侍哥連歌俳諧の達人風流能優名妓
いるまで世ふ名ある人々を集めて時代ふ
時代ふ年ごとに挙げいろはを以て見
安く記し故人を捜索とる其便ふ価あるもの
此書ハ東山殿よりの時異服食菜草木花菓器賦
万物近代未前に年暦諸流書画侍歌連俳香道茶生花
技芸及び芝居ふの起原人倫雑事年中行事
故実ふ何の頃より初すりしふこと委しくいひ
たまべ扨右ふ玉て博識乃捷径とする此新書

同　誹林沾凉大人著

近代世事談　全部五冊合巻三冊

後篇近刻

此書を諸職に秘密奥儀ふいるまで委
あるべ所ハ国祈り門ごく初ごく之外諸
国乃産物ひろひ寸天ふそこ〻ぶ〻
諸工商の重宝とはしむるり此書を
それ〻ふ後篇ふ〻〻〻出

一名萬金産業袋

町家萬寶

商賣仕法大成　全部六冊合巻三冊

手嶋堵菴先生述

女訓姿見 **女前訓躾種** 繪入 全一冊

此書は女子七才より教ゆべき事から成長して孝行貞操の乱を失ひ貧乏の節倹を守りて富を求るを深く戒の式儀法式を女盛衰と言古衣服を飾る心を外女代重宝を事数を条々先生深く和とのの著述せり絵入教訓陸一の長本の書之

人倫の正路を持敬積仁知命致知長者の五則をいへども学ぶべきを知ることを敬を先生の則の人をおるまで平ゆるを和解以幸に附ゆる義を仁義の道を知る用ゆる賢を節後を慎ひ立身出世をする教諭せり世上五品の長本之此書を子孫に残すべし公家の明断寿ぶん所あり先生の絵を孫後に残すべき書なり

鎌田柳弘先生作

心學五則 全壱冊

六樹園大人譯 前篇六冊 後篇六冊

通俗排悶録 溪斎英泉画

浪速書肆 心敬稽通情男町角

河内屋茂兵衛藏版

新刻 増補 **萬代早引節用集大成** 真字附 全二冊

節用集の善本数板を出て便利成支譬ふる小物部雖然ふるく常用社文字不足のりて隔書撥癖思ひ遺憾少かれ此度宮田先生丹誠苦心乃効と賛て其不足雅俗乃文字所輯録尚諸人日用の支を数多増加新板大成所敬端最堅右之置ける故高覧を給ん支所希而已

○薄葉摺出来仕候間何卒用向奉希上作

増修 **續王代一覧** 正編 北五冊 初帙十冊

此書は人皇一百八代後陽成院天皇天正十五年より一百九代後水尾院天皇元和二年迄三十年此間の治乱変改乃沿革名人達士詩歌連俳番茶名僧知識の傳記神社併閣の興廃金銀米銭所差分々々紀々々屈と所記一巻一巻一句を朝乱の挙ざ所抑菴先生盡く其本書所引紀一巻を一変一句を朝乱の挙ざ所右者一考古の小史と成続編は元和三年より知る

開卷驚奇俠客傳第五集 全五冊

此書第四集四十回までハ故曲亭翁の作にして善く世ふ知処なり然るに曲亭翁物故せしより後ふりて竟ふ結局ふ至らず依て浪華の森亭翁其篇を續て第五集四十一回より第七編迄推考して彼意ふ遠ざる編述せしを五集五冊此まで刊行を六集を既脱稿せしを近れ世ふ世ふ幕らべ希くハ四方此君ふ采集ふ替らべ高評を賜ふ

右の書初編第四冊後帙四冊を山東京傳翁の編輯ふして開く世ふ流布し尤面白き妙作と称やすふ結局ふ至らずして作者物故せしを惜べ者官甚惜

甲陽軍鑑 合卷拾冊

一名武田全書ともいふ作者公卿一代の戦功載書を記し陣営兵伍の為國を著し本邦第一の兵書称ふべし住編なり

善知鳥安方忠義傳

浪華書肆 群玉堂主人誌

東都葛飾戴斗画

花鳥画傳 初篇 二篇 全二冊

此書ふ称鳥草木花虫何ふれとなく辨ふ辨ふれば画と畫ふ人雅史ふ物ふ需ふ画法ふ重宝の画手本ふ

一勇齋國芳画

一勇画譜 全一冊

國芳多年ふ工夫を凝ふ彩奇妙業の景を画ふ方ふ画きたまへ善画ふる画譜の稀ふ雲仮の景ふ中ふ世ふ称ふる画本ふ

北齋爲一老人画

繪手本水滸画傳 全一冊

此画ハ画狂老人の筆にして水滸伝一百八人乃者像を丹精凝細筆ふ出画手本第一書ふ

柳川前重信画

繪手本水滸画傳 全二冊

此画ハ兼の柳川先生ふ筆ふして水滸伝一百八人乃英雄を筆ふ記ふ画ふ花花ふ附して幸ふ栄ふ刺画を好む人の便ふ

葛飾戴斗画

英雄圖會

全一冊

此書ハ本朝英雄良將名士の肖像とする佛大人細筆に画ユせ給ふ小伝ハ人々くれを備君の求く上梓ハ

一勇齋國芳画

三國英勇画傳

全一冊

呉蜀魏三國よその名を以英雄と呼ハ寺位一名ふ人一雪斎が筆力と推ひれば一元人が水滸画伝ハもとより劣らぬ名筆紙

同画

忠臣銘々画傳

全一冊

此書ハ赤穂の義士四十七個忠の実伝と挙て國芳大人肖像画を考れば求くれ給ハ

溪斎英泉画

畫本錦之嚢

葛飾戴斗画

全一冊

萬職圖考

初篇二篇三篇四篇五篇全五冊

大阪書林　河内屋茂兵衛　梓

釋尊御一代記圖會

全部六冊

山田意齋嘆参考

前北齋老人圖画

釋迦如来の御父浄飯大王の御即位と霞端と橋曇彌摩耶西夫人の内如来摩耶夫人の胎内小生と託事橋曇彌夫人摩耶夢中乃説法小母の十恩王子の出生次第と道師小呪咀とむる條如来と銳の吏浄飯王藍毘尼園小花の宴と催悉達太子誕生の寿瑞と銳の吏浄飯王藍毘尼園小花の宴と催悉達太子誕生の寿瑞悉達太子御幼稚より菩提心と發心遺恨の悲達太子宮中と出て檀特雪山小難行正覚成道して出山衆生の濟度吏迦葉舎利弗目蓮及諸羅漢佛弟子成和解耶愉陀羅女の貞心提婆が十悪須達月蓋両長者の信心流離王の暴悪釈尊御入滅五蘊神力涅槃像の欠もぞ都て如来御一代の事を記圖と加へ雖右續本也

浪花　好華堂主人著編

大伴金道忠孝圖會

前篇五冊　後篇五冊

此書天智天皇の御宇に百濟國の緩の兵と遣唐使と首く〜相大臣が燈臺鬼と成

謂大伴真鳥兄と云く家岡と押領せ

奸悪大友白王子淨見原天皇と御合戰の

次第金道の生涯白虫大鳥の忠義雅明

が義心真鳥の奢侈金道万苦と凌て文

乃代と復一本領に安堵せ迚の奇妙と

洩さず記せ実録にて勿論夫に遺跡

善と勸め悪と懲と使と而白の新本也

同上

扶桑皇統記圖會

前篇六冊　後篇七冊

此書八人皇四十代天武天皇の御治世より六十代

醍醐天皇の御宇迄の公事の根元宮殿往

院の草創代々の人物の行条と紀と所謂

役行者安部仲丸吉備大臣衣通姫光明

皇后良弁僧正弓削道鏡恵見押勝中

將姫傳教大師弘法大師田村丸浦嶋が

子小野篁在原行平業平小野小町僧

正遍照菅丞相其外古人の実傳と探索

精〜輯録〜巻く國画と加一重宮の書く

日本百將傳一夕話

全十冊

松亭金水編述

柳川重信畫圖

扨も本朝開闢以来　神代のことは因く舎て　神武の皇朝より今に賢び

彼面目が挑なんで三千年に向ともその中間に生まるるもの七百餘年恒河沙ごとかく

限りなき死人物のうちに武名海内に溢て功と第世に遺せるもの元来挙て算ふべからざる

その中にも傑然たる名將の事實伐撰さ輯むる處一百員上古人　神武東征

の時順に奉りて勲績ありき道臣命に防まり元亀天正に至て千古獨歩の

豊公に畢ぬ。いま俗作者が杜撰に輯めし所あるも仕背林羅山先輩の

人物戎億兆の中より擇み出さまて百將傳と題せられ各〜に一代の勲績の概

畧を漢文にて銘せ〜書あること人のよく知る所にして万代不易の珍書なれば

今に至て仰ぎ学び親しい其文を風字に和らげ親しい新撰補〜て童蒙の

觀とするせど何まも小冊にて事ゆきをいかと我　皇國に勲績ある名將さちれ

傳を撰ぶまで惟異聞珍説をも掲げ出せしかば浪華人が編雜
ものゝ百人一首の一夕話なるべきの趣を撰へて繰らちやうの腹藁にせ幸人浪華の墨客
余が志に関意して開板せんと請ふよう速に筆を採りて才図拙を顧ざる禍
悅び拵に上りて近きに発市あらんと結も拵とはなる百首の作の前の件のもの如く
神武東征の御時より天正の際に至りて年数凡二千二百餘　帝王一百八世経過
上古中世近世と時代の易るのまゝ一百員を良智の将その行ひ」なるべき猛
いの十人に十種の乱象ありるのまゝ擁孫智異の変化あり。されば此書を出有人
好こに隨つて巻を開けばその時代の風俗及び一治一乱いかも更なり。その人それ
出自家系或ひは詠ぜし詩文の佳作具まさにそれに連る人の物語さへ巨細に義人除も
ことのゆゑざれば諸書を集めて彼と是と心を労さんその人とその年傳と知るの任捷なり。
是に彩像を加へ親しく童蒙の多に解べ漢あんと思ふが為のまゝ金水老人が
多年の丹誠今まで繰り遊戯の書と荷まく聽なりまゝ

浪華書賈　羣玉堂　河内屋茂兵衛　梓

林書

京都寺町通佛光寺　河内屋藤四郎
江戸日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛
同　貳丁目　山城屋佐兵衛
同　貳丁目　須原屋新兵衛
同　四日市　山城屋政吉
同　本石町十軒店　英大助
同　下谷御成道　英文藏
同　大傳馬町貳丁目　丁子屋平兵衛
同　芝神明前　岡田屋嘉七
大阪心齋橋通本町角　河内屋藤兵衛
大阪心齋橋筋博多町　河内屋茂兵衛